「埋め込み文」の特性からみた フィンランド語の分析的使役構文

千葉　庄寿 (東京大学大学院)

第 26 回ウラル学会
1999 年 7 月 3 日 (土)　於 関西外国語大学

本発表では、*pan-na* 'put', *saa-da* 'get' という 2 つの動詞がとる以下のような構文について、その用法を比較検討する：

- 主語 (使役者) + 主動詞 *pan-na* 'put' + 目的語 (被使役者) + 第 3 不定詞入格形
- 主語 (使役者) + 主動詞 *saa-da* 'get' + 目的語 (被使役者) + 第 3 不定詞入格形

これら 2 つの動詞は、ともに目的語と第 3 不定詞入格形をとっており、第 3 不定詞の主語が主動詞の目的語に対応している。従って、2 つは同一の構文形式に属すると考えることができる。このグループを、本発表では**panna 型構文**と呼ぶことにする。

(1)　*Äiti*　***pan-i***　*poja-n*　*pyytä-mä-än*　*anteeksi.*
mother.NOM　put-IMP.3SG　boy-ACC　ask-3INF-ILL　sorry
主語＝使役者　動詞＝使役　目的語＝被使役者　不定詞＝実際の行為
「母親は少年を謝らせた」(*PS*, 見出し語 *panna* の項)

(2)　*Poika*　*pyy-si*　*anteeksi.*
boy.NOM　ask-IMP.3SG　sorry
「少年は謝った」(作例)

(3)　*Hän*　***sa-i***　*meidä-t*　*suostu-ma-an.*
(s)he　get-IMP.3SG　we-ACC　agree-3INF-ILL
「彼 (女) はわれわれを同意させた」(*idem.* p.275)

例文 (1) では、母親が子供に許しを請わせる、という使役と考えられる状況が、主動詞 *pan-na* 'put' と、動詞の第 3 不定詞入格形 (動詞語幹 + 不定詞のマーカー *-ma/-mä* + 入格語尾 *-an/-än*) という、2 つの異なる動詞によって分析的に表現されている。

1　コーパス

分析の基礎資料として、フィンランドの週刊誌 *Suomen Kuvalehti* の 1987 年の記事全文を電子化したコーパス (ヘルシンキ大学一般言語学科所蔵、総語数約 120 万語) を用いる [1]。コーパスからは、全部で 1300 例ほどの panna 型構文の用例がえられ、構文の主要部として現れた動詞は異なり語数で 180 種あった。今回の考察対象である動詞 *panna* を主動詞にもつ構文の例は 84 例、*saada* を主動詞とする用例は 330 えられた。従って、*saada* は *panna* よりずっと多く、およそ 4 倍の頻度で出現した (後者は、panna 型構文をとって現れる主動詞のなかで出現頻度が最も高かった動詞である)。

2　panna 型構文

panna 型構文は一般に「誰かを説得したり、導いたりする動作をあらわ」し (Setälä 1973:115)、従って基本的には有生の目的語をとると考えられている (Hakulinen & Karlsson 1979:384)。panna 型の構文形態をとる動詞の数は多く (Siro 1964:108)、この構文をとりうる動詞として、Penttilä (1963[2]:405) ではおよそ 70 の動詞を、また Jönsson-Korhola & White (1997) では 42 の動詞を挙げている。

(4)　*Minä*　{ ***käsk-i-n*** / ***pyy-si-n*** }　*hän-tä*　*luke-ma-an.*
I.NOM　order-IMP-1SG　ask-IMP-1SG　(s)he-PAR　read-3INF-ILL
「私は彼 (女) に本を読むよう { 命じた / 頼んだ } 」 (Setälä 1973[16] *ibid.*)

本発表でとりあげる panna 型構文をとる動詞 *panna, saada* には、いくつかの注目すべき独自の性質がみられる。

特徴 1：「埋め込み文」であらわされる出来事の達成が含意される (cf. "finaalinen implikaatio" (Hakulinen & Karlsson *ibid.*))

(4)　b. *Minä*　*käsk-i-n*　*hän-tä*　*luke-ma-an,*　*mutta*　*hän*
I.NOM　order-IMP-1SG　(s)he-PAR　read-3INF-ILL　but　(s)he.NOM
ei　*suostu-nut.*
VNEG.3SG　agree-PSPT
「私は彼 (女) に本を読むよう命令じたが、彼 (女) は読もうとしなかった」 (作例)

b′. **Minä*　***sa-i-n***　*häne-t*　*luke-ma-an,*　*mutta*　*hän*
I.NOM　get-IMP-1SG　(s)he-ACC　read-3INF-ILL　but　he.NOM
ei　*suostu-nut.*
VNEG.3SG　agree-PSPT
「私は彼 (女) に本を読ませたが、彼 (女) は読もうとしなかった」 (作例)

[1] このコーパスからえられた例文には、**sk**-[ファイル番号]:[行番号] という形で出典を記載する。紙幅の都合上、正しく理解できる範囲で原文を簡略化することがある。

特徴２：動詞自身のもつ、目的語の指示対象の物理的な移動の意味 (*panna* ‘put’; *saada* ‘get’) が失われている (例文 5b, 6c)

(5) a. ***pan-na*** *ruoka* *pöytä-än*
put-1INF food table-ILL
「料理をテーブルに置く」(*PS*, *panna* 1.)

b. ***pan-na*** *kello* *soi-ma-an*
put-1INF clock ring-3INF-ILL
「時計を鳴らす」

(6) a. ***Sa-i*** *isä-ltä-än* *kello-n* *ja* *raha-a.*
get-IMP-3SG father-ABL-PX3 watch-ACC and money-PAR
「彼 (女) は父親から時計とお金をもらった」(*PS*, *saada* 1.)

b. ***Sa-i*** *vastaantulija-lta* *tule-n* *tupakka-an.*
get-IMP.3SG passenger-ABL fire-ACC cigarette-ILL
「彼 (女) は通行人から (タバコに) 火をもらった」(*ibid.*)

c. *jotta* *ihmise-t* ***saa-taisiin*** *pysy-mä-än* *asio-i-ssa*
so that human-PL.ACC get-PASS.COND keep-3INF-ILL things-PL-INE
「人々がものごとに執着するようにさせるには」(sk-45:1072)

特徴３：主語、目的語として無生名詞をたてることができる

(7) *kaasu-jen* *pelko* ***sa-i*** *miehe-t* *perääntty-mä-än*
gas-PL.GEN fear.NOM get-IMP.3SG man-PL.ACC retreat-3INF-ILL
「ガスの恐怖が人々を避難させた」(sk-20:765)

(8) *Ei* ***saa-tu*** *kuorma-a* *käänty-mä-än.*
VNEG.3SG get-PASS.PSPT burden-PAR turn-3INF-ILL
「トラックが (道を) 曲がらなかった」(Penttilä 1963[2]:406)

(9) *eräs* *järjestäjä* ***pan-i*** *vahingo-ssa* *väärä-n* *musiiki-n*
certain organizer.NOM put-IMP.3SG accident-INE wrong-ACC music-ACC
soi-ma-an *erää-seen* *kohtaukse-en.*
sound-3INF-ILL certain-ILL scene-ILL
「主催者の一人が、ある場面で間違って違う音楽を鳴らした」(sk-46:952)

特徴１, ２から、2 つの動詞がとる panna 型構文を使役構文と考えることができる (Shibatani 1976:2; Kemmer & Verhagen 1994:119)。一方、特徴３は、構文の表わす使役が、人間の間でおこなわれるものに限らないことを意味している。

3 問題の在処

panna 型構文の意味と用法が、2 つの動詞でどう違うかは、これまでにあまり注目されていない。ここでは、2 つの問題点を指摘する。

3.1 *panna* と *saada* を言い換えると意味が変わる

上で述べた共通性にも関わらず、実は 2 つの動詞の表わす使役の内容は完全に同義でない。

(1) *Äiti* ***pan-i*** *poja-n* *pyytä-mä-än* *anteeksi.*
mother.NOM put-IMP.3SG boy-ACC ask-3INF-ILL sorry
「母親は少年を (e.g. 命令して) 謝らせた」(再出, カッコ内に記したのはインフォーマントの解釈)

(1′) *Äiti* ***sa-i*** *poja-n* *pyytä-mä-än* *anteeksi.*
mother.NOM get-IMP.3SG boy-ACC ask-3INF-ILL sorry
「母親は少年を (e.g. あれこれ手を使って) 謝らせた」(作例)

ある場合には、被使役者が置かれる状況が動詞の種類によって全く異なってくる。

(10) a. *miten* *siellä* *on* *kameli-t-kin* ***saa-tu*** *lisääntу-mä-än*
how there be.3SG camel-PL.ACC-Q get-PASS.PSPT multiply-3INF-ILL
「どうしてそこでラクダたちが増えることができるのか」(sk-37:611)

b. *miten* *siellä* *on* *kameli-t-kin* ***pan-tu*** *lisääntу-mä-än*
how there be.3SG camel-PL.ACC-Q get-PASS.PSPT multiply-3INF-ILL
「どうしてそこでラクダたちを繁殖させることができるのか」(作例)

また、主動詞の種類による意味の違いが殆どみられず、単に表現上の「強さ」の違いとしてしか認識できない場合もある。

(11) a. *Ääni* *portaiko-ssa* ***sa-i*** *Anita-n* *käänty-mä-än.*
voice.NOM staircase-INE get-IMP.3SG Anita-ACC turn-3INF-ILL
「階段の声にアニタは振り向いた」(sk-33:1923)

b. *Ääni* *portaiko-ssa* ***pan-i*** *Anita-n* *käänty-mä-än.*
voice.NOM staircase-INE get-IMP.3SG Anita-ACC turn-3INF-ILL
「階段の声がアニタを振り向かせた」(作例)

(12) a. *sanfranciscolaise-t* *o-vat* ***pan-neet*** *insinööri-t*
San Franciscan-PL.NOM be-3PL put-PL.PSPT engineer-PL.ACC
tutki-ma-an, ···
investigate-3INF-ILL,
「サンフランシスコの人々は、専門家に ··· かどうかを調査させている」(sk-21:807)

b. *sanfranciscolaise-t* *o-vat* ***saa-neet*** *insinööri-t*
San Franciscan-PL.NOM be-3PL get-PL.PSPT engineer-PL.ACC
tutki-ma-an, ···
investigate-3INF-ILL,
(作例)

3.2 *panna* と *saada* を言い換えることが不可能

これまでに見てきた例からは、2 つの動詞がつくる構文の意味の度合いは、使役者が被使役者に対してもつはたらきかけの強さの違いに求めることができそうである。ところが、以下の例文のように、上で行ったような動詞の入れ換えが不可能な例が存在する。

(13) a. *show, joka* ***saa*** *Irangate-n* *unohtu-ma-an*
show which.NOM get.3SG Irangate-ACC be forgotten-3INF-ILL
「イランゲート事件が忘れられるようにさせる (政治的な) ショー」
(sk-46:1918)

b. **show, joka* ***pane-e*** *Irangate-n* *unohtu-ma-an*
show which.NOM put-3SG Irangate-ACC be forgotten-3INF-ILL

(14) a. *jo luontoäiti ol-isi* ***pan-nut*** *äidi-t*
already Mother Nature.NOM be-COND.3SG put-PSPT mother-PL.ACC
synnyttä-mä-än useimmin ensiksi poja-n kuin tytö-n.
give birth-3INF-ILL often first boy-ACC than girl-ACC
「既に自然の摂理が母親にはじめにまず娘より息子を産ませているのかもしれない」(sk-33:400)

b. *Hän on* ***saa-nut*** *Kenia-an synty-mä-än pelo-n*
(s)he.NOM be.3SG get-PSPT Kenya-ILL be born-3INF-ILL fear-GEN
ja epäluulo-n ilmapiiri-n.
and suspicion-GEN atmosphere-ACC
「彼はケニアに恐怖と疑いの雰囲気を生まれさせた」(sk-36:1431)

(15) a. *Muutama-t joukkuee-t* ***pane-vat*** *raha-a haise-ma-an*
several-PL.NOM team-PL.NOM put-3PL money-PAR stink-3INF-ILL
sadoin tuhansin
hundreds thousands
「いくつかのチームはお金をばんばん使っている」(sk-14:2183)

b. **Muutama-t joukkuee-t* ***sai-vat*** *raha-a haise-ma-an*
several-PL.NOM team-PL.NOM put-3PL money-PAR stink-3INF-ILL
sadoin tuhansin
hundreds thousands

この非対称性は、何に起因するものなのであろうか。前に挙げた、使役者が被使役者に対してもつはたらきかけの強さの度合いだけでは、このような違いは説明できない。

以下、主動詞 *panna, saada* に「埋め込まれている」被使役者がおこなう行為の種類に注目して、用例データを詳しく検討してみることにする。

4　使役者のはたらきかけの直接性

この節では、動詞の置換ができないケースを具体的に検討し、*panna* と *saada* を用いた panna 型構文の意味の違いを検討する。主語の指示対象を表わす用語として「使役者」を、目的語の指示対象を表わす用語に「被使役者」を用いる。また、目的語と第 3 不定詞が表わす叙述内容を、「埋め込み文の表わす出来事」と呼ぶ。

まず、*saada* から *panna* への置き換えができない例を考察してみよう。以下の例において、主語は (ものとして存在していない) 目的語に直接触れることができない、という特徴がある。

(16)　a.　*konee-n*　*ään̈re-ssä*　***saa***　*aja-n*　*pysähty-mä-än̈*
machine-GEN　edge-INE　get.3SG　time-ACC　stop-3INF-ILL
「この機械のそばでは (人は) 時間を止まらせることができる」(sk-40:1653)

a.　**konee-n*　*ään̈re-ssä*　***pane-e***　*aja-n*　*pysähty-mä-än̈*
machine-GEN　edge-INE　get-3SG　time-ACC　stop-3INF-ILL

次の例の場合、主語のはたらきかけは (直接であれ間接であれ) 目的語に向けられていない。

(13)　a.　*show,*　*joka*　***saa***　*Irangate-n*　*unohtu-ma-an*
show　which.NOM　get.3SG　Irangate-ACC　be forgotten-3INF-ILL
「イランゲート事件が忘れられるようにさせる (政治的な) ショー」(再出)

b.　**show,*　*joka*　***pane-e***　*Irangate-n*　*unohtu-ma-an*
show　which.NOM　put-3SG　Irangate-ACC　be forgotten-3INF-ILL

現実に存在する指示対象が被使役者として現れていても、使役者以外の指示対象の助けを借りなければ「埋め込み文」の表わす出来事が実現しない場合、*panna* を用いた置き換えはできない：

(17)　a.　*Hän*　***sa-i***　*silmä-ni*　*avautu-ma-an*
(s)he.NOM　get-IMP.3SG　eye-PL.ACC.PX1SG　be opened-3INF-ILL
oma-lle　*ominaislaadu-lle-ni.*
own-ALL　original quality-ALL-PX1SG
「彼 (女) は私の眼が私自身の個性へと開くようにさせた」(sk-41:2218)

b.　**Hän*　***pan-i***　*silmä-ni*　*avautu-ma-an*
(s)he.NOM　put-IMP.3SG　eye-PL.ACC.PX1SG　be opened-3INF-ILL
oma-lle　*ominaislaadu-lle-ni.*
own-ALL　original quality-ALL-PX1SG

他人の眼は、その眼の持ち主の意思なしには開けることができない。

これまで見てきたように、主動詞 *panna* を用いた構文によって表現できないのは、使役者が「埋め込み文」の表わす出来事に間接的にのみはたらきかける場合である。このことから、*panna* は使役者が被使役者に直接はたらきかける場合に用いられる、と考えることができる。

次に、*panna* から *saada* への置き換え可能性を、以下の例文で考察してみる (置き換えが全く不可能な例は、それほど多く見つからなかった)：

(18) a. *Muutama-t* *joukkuee-t* ***pane-vat*** *raha-a* *haise-ma-an*
several-PL.NOM team-PL.NOM put-3PL money-PAR stink-3INF-ILL
sadoin *tuhansin*
hundreds thousands
「いくつかのチームはお金をばんばん使っている」(sk-14:2183)

b. **Muutama-t* *joukkuee-t* ***sai-vat*** *raha-a* *haise-ma-an*
several-PL.NOM team-PL.NOM put-3PL money-PAR stink-3INF-ILL
sadoin *tuhansin*
hundreds thousands

この例文の被使役者にあたるのはお金である。「埋め込み文」は「お金が流出する」といった意味の慣用句であるが、この「埋め込み文」が表わす出来事が実現するには、そのお金を人が実際に用いることが必要であり、何らかの間接的な影響だけでお金が減っていくわけではない。このことから、*saada* は使役者が被使役者に対し直接はたらきかけることはできない、と考えられる。同様の理由で以下の例文でも *saada* を用いることはできない：

(19) *mutta* *31* *prosentti-a* ***pane-e*** *mene-mä-än* *yli* *500*
but 31 percent-PAR put-3SG go-3INF-ILL over 500
「しかし、(回答者のうち)31 パーセントは 500 マルッカ以上を使っている」
(sk-11:2629)

従って、「使役者が被使役者にどうはたらきかけるか」、という基準は、*panna* と *saada* のつくる構文の用法の違いを説明する重要な基準であるといえる。

5 話し手の関心

使役者から被使役者へのはたらきかけの直接性・間接性という特徴に加え、*panna* と *saada* を主動詞とする構文のもうひとつの重要な違いは、話し手の関心がどこにあるか、である。

客観的な基準を用いて話者の視点を質的に調査することは難しい。今回は、第 3 不定詞として現れる動詞の種類に注目した。以下に、コーパスからの頻度情報をまとめる (表 1)。

表 1： 動詞 *panna*, *saada* のとる第 3 不定詞の種類

	panna		*saada*	
動詞の種類 \ 出現頻度	異なり	のべ	異なり	のべ
自動詞	32	36	149	209
(+ 節)	0	0	14	15
他動詞	30	35	64	86
(∅ 目的語)	4	4	7	7
(+ 不定詞, 節, 分詞構文)	4	10	7	14
自/他	2	2	0	0
不明/その他	1	1	2	2
合計	73	88^{α}	216	333^{α}

$^{\alpha}$ 第 3 不定詞入格形が複数連続する例があるため、用例の総数よりも不定詞の総数の方が多くなっている。

panna を主動詞とする panna 型構文の用例では、第 3 不定詞として自動詞と他動詞がともにほぼ同等の率で現れるのに対し、*saada* では、明かに自動詞の出現率が高い。これは、どういうことであろうか。

(20) *Lähdekirjallisuus* ***pan-i*** *Tuulikki* *Korpise-n* *pysähty-mä-än*
reference.NOM put-IMP.3SG T. K.-ACC stop-3INF-ILL
「文献一覧がコルピネンを立ち止まらせた」(sk-16:1282)

(21) *Mikä tahansa* *virhe* ***saa*** *reaktori-n* *pysähty-mä-än*
whatever mistake.NOM get.3SG reactor-ACC stop-3INF-ILL
「どんな間違いでも反応炉を止まらせる」(sk-10:596)

(22) *Reini-n* *myrkkypäästö* ***sa-i*** *häne-t* *kirjoitta-ma-an*
Rein-GEN noxious emission.NOM get-IMP.3SG (s)he-ACC write-3INF-ILL
runo-n.
poem-ACC
「Rein の毒物排出は彼 (女) に詩を書かせた」(sk-47:1354)

(23) *Tutkija-t* ***pan-tiin*** *selvittä-mä-än* *ilmiö-n*
researcher-PL.NOM put-PASS.IMP make clear-3INF-ILL phenomenon-GEN
sy-i-tä.
reason-PL-PAR
「研究者たちに現象の原因を明かにさせた」(sk-11:1721)

saada を主動詞とする構文で特に目立つのが、対応する他動詞と派生関係にある自動詞、その中でも対応する他動詞の目的語を主語にとる自動詞が多いことである (この自動詞を以下 S=O 自動詞と呼ぶ)。S=O 自動詞をつくる代表的な派生辞 *-u-/-u-*, または *-utu-/-yty- ~ -ntu-/-nty-* を伴って実際に *saada* と共起した動詞をいくつか示す。

S=O 自動詞		対応する他動詞	
innost-u-a	'become enthusiastic'	*innosta-a*	'inspire'
kirkast-u-a	'become brighter'	*kirkasta-a*	'make brighter'
loukkaa-ntu-a	'be injured'	*louka-ta*	'hurt'
muutt-u-a	'change (into)'	*muutta-a*	'change'
näk-y-ä	'be seen'	*näh-dä*	'look at'
vakuutt-u-a	'convince oneself'	*vakuutta-a*	'convince'

このグループの動詞以外にも、第 3 不定詞として現れた対応する他動詞のペアをもつ S=O 自動詞は非常に多い (e.g. *huolest-u-a* 自動詞 'be worried' vs. *huolestutta-a* 他動詞 'worry'; *perää-nty-ä* 自動詞 'retreat' vs. *peräännyttä-ä* 他動詞 'withdraw'; *toteut-u-a* 自動詞 'come true' vs. *toteutta-a* 他動詞 'carry out'; *kylme-tä* 自動詞 'get colder' vs. *kylme-ntä-ä* 他動詞 'make colder' etc.)。*saada* を主動詞とする構文の第 3 不定詞としてコーパスに現れている自動詞 209 例中、このような S=O 自動詞は 143 例 (68.4%, 333 例の第 3 不定詞全用例中 42.9) に及ぶ。これに対し、S=O 自動詞が *panna* を主動詞として現れた例は、36 例中わずかに 11 例 (30.6%) であった

saada を主動詞とする構文で他動詞に比べ自動詞が多く現れた理由は、この S=O 自動詞の頻度の高さによるとおもわれる。ではなぜ、これほど多くの S=O 自動詞が不定詞としてとりわけ *saada* と共起するのだろうか。上述の派生辞は、受身や再帰を表わす接辞である (Vesikansa 1978: 116–121)。つまり、S=O 自動詞は、何らかの影響を受けた結果を表わすといえる。

例文 (17a) はその典型例である。

- *unoht-**u**-a* S=O 自動詞 'be forgotten' < *unohta-a* 他動詞 'forget'

(17a) *show, joka **saa** Irangate-n* *unohtu-ma-an*
show which.NOM get.3SG Irangate-ACC be forgotten-3INF-ILL
「Irangate が忘れられるようにさせる (政治的な) ショー」 (再出)

6 まとめ

A 略号一覧

グロスは形態素をハイフン - で区切る。マーカーの顕在しない語形のもつ情報や、文法情報を複数含むいわゆる鞄型形態素のグロスは、ピリオド . に続けて表記している。表記の簡略化のため、複合語や派生接辞等の形態分析は、本論に差し障りのない限りにおいて省略することがある。また、ことわりがない限り動詞は第 1 不定詞、名詞は主格の形で挙げている。グロスに用いる略号は以下の通り:

&=列挙の小辞; 1,2,3=人称; 1INF=第 1 不定詞; 2INF=第 2 不定詞; 3INF=第3不定詞; ABL=奪格; ACC=対格; ADE=接格; ALL=向格; COMP=比較級; COND=条件法; ELA=出格; ESS=様格; GEN=属格; ILL=入格; IMP=未完了過去; INE=内格; MAPT=動作主分詞; NOM=主格; PAR=分格; PASS=受動; PL=複数; PRPT=現在分詞; PSPT=過去分詞; PX=所有接尾辞 (+人称,(数)); Q=疑問の小辞; SG=単数; SUP=最上級; TRA=変格; VNEG=否定動詞

B 参考文献

Hakulinen, Auli and Fred Karlsson 1979 *Nykysuomen lauseoppia.* Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Jönsson-Korhola, Hannele & Leila White 1997 *Tarkista tästä.* Helsinki: Edita.

Kemmer, Suzanne & Arie Verhagen 1994 "The grammar of causatives and the conceptual structure of events" *Cognitive Linguistics* 5: 115–156.

Kytömäki, Leena 1978 "Kuratiivikausatiivi" In Alhoniemi, Alho (ed.) *Rakenteita: Juhlakirja Osmo Ikolan 60-vuotispäiväksi.* Turku: Turun yliopiston Suomalaisen ja yleisen kielitieteen laitos. pp. 129-150.

Penttilä, Aarni 1963[2] *Suomen kielioppi.* Porvoo, Finland: Werner Söderström.

PS = Haarala, Risto (Editor in Chief) 1990–1994 *Suomen kielen perussanakirja.* Helsinki: Kotimaisten kielten tutkimuskeskus.

Setälä, E. N. 1973[16] [1880] *Suomen kielen lauseoppi.* (editted by Sadeniemi, Matti) Helsinki: Otava.

Shibatani, Masayoshi 1976 "The grammar of causative constructions: A conspectus" In Shibatani, Masayoshi (ed.) *The Grammar of Causative Constructions.* Syntax and Semantics 6. New York: Academic Press. pp.1–40.

Siro, Paavo 1963 *Suomen kielen lauseoppi.* Helsinki: Tietosanakirja.

Siro, Paavo 1996 [1978] "Kausatiivien kielioppia" Helsinki: Helsingin yliopiston suomen kielen laitos. pp. 129–196.

Vesikansa, Jouko 1978 *Johdokset.* (Nykysuomen Oppaita 2.) Porvoo: Werner Söderström.

Vilkuna, Maria 1996 *Suomen lauseopin perusteet.* Helsinki: Edita.